慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	文化の表象としての批評言語学
Sub Title	Critical linguistics for the representations of culture
Author	井上, 逸兵(Inoue, Ippei)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1995
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.68, (1995. 5) ,p.81(146)- 97(130)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00680001-0097

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

文化の表象としての批評言語学

井　上　逸　兵

1．はじめに

本論では井上（1991）で取り上げた批評言語学（Critical Linguistics）[1]を社会運動的言語研究として再評価し，さらに「言語としての文化」という文化記号論のテーマにおける枠組みとしての批評言語学の可能性を論じたいと思う。特に前者の議論においては一般意味論との関わりにおいて論じ，後者においては応用言語学ならぬ「言語学の応用」によって「文化の型」を記述するひとつのアプローチとしての有効性を主張したい。したがって，ここでは Hodge & Kress（1979），Fowler（1986,1991），Simpson（1993）らの元来の関心とは異なった視点から批評言語学を論ずることになる。

2．社会運動としての批評言語学

2.1. 批評言語学の分析方法

批評言語学の基本的な前提は「ニュースは『現実』から自然に現れてくる現象ではなく，ひとつの『生産物（product）』」[2]であり，「社会的に構築されたカテゴリーに従って出来事や話題を体系的に選択する複雑なプロセスの産物」[3]であるというものである。つまり，ニュースは世界についての事実ではなく，それについての一つの見方であり，観念であり，信念，価値，イデオロギーの体現というわけである。そして，この現実世界とニュースとに介在するいわばバイアスを分析，解明することが批評言語学の任務とされている。

批評言語学が文体論の流れをくみながらもいわゆる言語学プロパーとは基本的に異なった性格をもっていることはRoger Fowlerの次の言葉に端的にあらわれている。(Fowler, 1991, p. 5)

The prevailing orthodoxy of linguistics is that it is a *descriptive* discipline which has no business passing comments on materials which it analyses; neither *prescribing* usage nor negatively evaluating the substance of its enquiries. But I see no reason why there should not be branches of linguistics with different goals and procedures, and since values are so thoroughly implicated in linguistic usage, it seems justifiable to practise a kind of linguistics directed towards understanding such values,…

これを仮に「言語学」と呼びうるとしても，記述的な言語学の立場とは議論の余地のないほど根本的な指向の違いがある。本章では批評言語学にどのような評価が可能かを論じたいと思う。

批評言語学の主な分析対象は新聞報道である。ニュースは社会的，政治的な世界のいわばバイアスによって構築されるものとし、「現実」を仲介する際の言語の働きを研究対象とする。新聞報道は一般的には「客観的な事実」を伝えているものと思われている。報道する側もおそらくそのように努めているであろうし，社会にもふつうはそのように受けとめられている。だからこそ誤報や事実の歪曲などがあったり，報道する側の「中立的」でないとされる意図があると報道する者の責任が大きく問われるわけである。しかし，いかなるメディアもすべての「事実」を伝えることは物理的に不可能であり，どの「出来事」を伝え，どの「出来事」は伝えないか，さらに一つの「出来事」のさまざまな要素のうちどれかを伝え，どれかを伝えないという選択は常になされなければならない。一つの「出来事」の伝え方を複数の新聞で読み比べてみれば，それがいかに書き手を介在させて伝えられているかがよくわかる。したがって，Simpson(1993)の言うよ

うに，批評言語学の分析はテキストの言語的な構造を記述するというより，いかに解釈するかに重きが置かれる。Trew (1979) の分析例を挙げてみよう。次の例は独立前のジンバブエの「市民暴動」[4]についてのイギリスの2つの新聞の1975年6月2日の見出しと記事の冒頭の部分である。(大文字部分が見出し)

(1a) POLICE SHOOT 11 DEAD IN SALISBURY RIOT
Riot police shot and killed 11 African demonstrators.

Guardian

(2a) RIOTING BLACKS SHOT DEAD BY POLICE
Eleven Africans were shot dead and 15 wounded when Rhodesian police opened fire on a rioting crowd.

The Times

まず語彙の選択の相違は明白である。*Guardian* における 'African demonstrators' は *The Times* においては 'Rioting Blacks' であり，同時にそれに伴う批評言語学で言う transitivity[5]上の構造が異なる。ここで注目すべきは，「出来事」や「事件」が節や文として構造を与えられる事であるが，その文化記号論的な意義は後述するとして，transitivity の構造は大まかにみれば (1b) (2b) のようになる。

(1b) Riot police shot and killed 11 African demonstrators.
〈ACTOR〉 〈PROCESS〉 〈GOAL〉

(2b) Eleven Africans were shot dead [and] 15 wounded [when]
〈GOAL〉 〈PROCESS〉 〈GOAL〉 〈PROCESS〉
Rhodesian police opened fire on a rioting crowd.
〈ACTOR〉 〈PROCESS〉 〈GOAL〉

Guardian は能動構文を用い，ACTOR（ここでは殺した動作主）を節の最初の要素とし，GOAL（プロセスにおいて影響を受けたもの，ここでは殺された人）を節の終わりにおく。したがって，このプロセスにかかわる動作主（POLICE, Riot police）が 'shoot, shot' の動作主として強調されることになる。対照的に *The Times* は受動構文を用い，GOAL を焦点のおかれる位置におき，ACTOR は比較的目立たない位置におく。さらに *The Times* の冒頭のテクストにおいては動作主が最初の節においては削除され，第二の節からの推論によってのみ同定できる表現になっている。ここでは接続詞 'when' が「二つ」の出来事の同時性に言及することで動作主を不明確にする役割を担っていることになる。さらに Simpson（*ibid.*）のあげる(3)はそれに加えて動詞 'die' が動作主を隠蔽するという極端な例である。'The boy died' に対して 'who by ?' という問いはありえないからである。

(3) The boy died when policeman's gun went off.

Trew によれば(2)の *The Times* の受動構文化，動作主削除のねらいは銃殺した主体から犠牲者の方に注意をむけさせることだという。「真実性」という概念上のパラメーター内において，つまり「うそをついていない」範囲においてこの二つのメッセージは根本的に異なっており，この違いは二紙の政治的な志向，すなわち *Guardian* が政治的にいわゆる左寄りで，*The Times* が右寄りであることと関わりがあるとしている。このような見地から，テクストは中立的であることは決してないというわけである。Halliday (1985) の言葉で言えば，「我々は現象を一つの塊としてみるが，それについて話すときにはそれを意味的なゲシュタルトにおいて分析し直さなければならない」わけで，これは新聞報道を分析する側から言うと言語表現は表現者側のゲシュタルトなり，意味構造なり，単純化を恐れずにいえば，視点を必ず表しているものと見ることができる。

これだけの分析を見る限り，記述的な言語学からすればたんに Halliday などの機能文法[6]を応用して，transitivity などの概念を新聞報道に適用したに過ぎない，つまり，例文の収集を新聞から行っただけのことである，と言えなくもない。しかし，批評言語学は前述のようにこれを批評的に解釈することにまで分析を拡大し，さらにこの研究の文体論と並ぶもう一つの源である，Stuart Hall, Glasgow Media Group などニュースメディアの研究からもその方法論をとりいれている。

ニュースが選択される際の過程に関する研究の例をみてみよう。Galtung & Ruge (1973) によれば，ニュースメディアは伝える出来事を出来事の大きさ(死亡者の数など)，予期への一致度，意外性，エリートへの言及度，否定的なものへの言及度など12のニュース価（news value）の基準によって選択しているという。このニュース価の基準となる要因の定式化については議論もあり，本稿では細かく立ち入らないことにするが，ここで意味することを単純な例で説明してみよう。一般に「人が犬にかまれてもニュースにならないが，人が犬をかめばニュースとなる」というたとえがある。しかし，例えば筆者は何度も犬の鼻や耳にかみついたことがあるが，一度もニュースになったことがない。これは意外性という要因のみにニュース価をもとめたための誤解からくるのである。実際には他の要因におけるニュース価の高い「猛犬が人をおそった」というような出来事の方がニュースとして選択されることがしばしばある。日本の5月5日の子供の日の翌日には必ずといってよいほどどこかで子供が死亡したというような事件が記事となり，9月15日の敬老の日の翌日には老人が悲惨な死を遂げたといった記事が掲載される。それ以外の日であれば大きな記事にならないものがその日に限って大きく扱われる理由もこのようなニュース価の観点からみれば納得がいく。ここで注意しなければならないのは，このような基準や優先順位は文化によって異なると考えられることである。それも後述する異文化間の比較の事例研究の対象としてとりあげることが可能であろう。

2.2. 社会運動としての意義―一般意味論との類似点―

以上のような分析方法をとる批評言語学をどのように評価すべきであろうか。批評言語学は基本的には言語学の，特に Halliday の機能文法，談話分析の知見を利用してはいるものの，いわゆる「記述的な」言語学プロパーのとる態度とはかなり異なった印象を与える。批評言語学の分析手段としての言語学はいわば折衷主義的なものなので，従来の言語学の単一の枠組みによって説明することはできない。ご都合主義的な印象はまぬがれえないが，それはひとつに言語という現象そのものが多面的であるからであり，また批評言語学の関心事は理論的整合性よりも，まず分析すべき対象があり，理論は第一に分析の手段を提供するためのものだという認識があるからである。このような研究が言語学と呼ぶにふさわしいかどうかは別として，マスメディアのバイアス，価値判断は言語の使用に含意されていて，その分析には言語学的なアプローチが有効であることは認めなくてはいけないだろう。しかし，これは言語学という学問そのものの発展と言うよりはむしろその応用であり，教養の学として，基礎学問としての言語学，さらには社会運動としての言語学として評価すべきであると思われる。批評言語学のメディア分析の目的も基本的には記述的で，イデオロギーやマスメディアのバイアスを糾弾することが目的ではないが，ニュースは政治的，経済的その他のさまざまな要素が仲介しているということを社会に認識させ，そのバイアスを識別する眼を養わせようという意図があることは明白である。

言語学的な性格をもちながら，人類学，記号論理学，心理学，生物学，精神医学などの幅広い知見をふまえ，アメリカを中心に大きな発展を遂げた社会運動的な性格の研究として一般意味論がある。これは Korzybsky, Hayakawa らに代表される運動で，アメリカの教育界にも少なからぬ影響を与えた。一般意味論はマスメディアを特定的に議論の対象とはしていないが，批評言語学と共通する認識は例えば Hayakawa (1949) の次のような一節に見られる。(P. 25，イタリック体は筆者)

We live in an environment shaped and largely created by hitherto unparalleled *semantic influences*: mass-circulation newspapers and magazines which are given to reflecting, in many cases, the prejudices and obsessions of their publishers and owners....

ここでHayakawaがいう「意味論的影響（semantic influences)」とは，「地図は現地ではない」，「記号（ことば）はものではない」といったスローガンに見られるように，我々が記号やことばと現実とを混同するためにおこる様々な作用を言う。一般意味論は人間にはことばの意味とその指示物，あるいは事実とを同一視し，同一のものと錯覚する心理があり，それを逆手にとれば，ことばを歪めることによってそれが指示する事物や事実までも歪められてしまう危険性に対して警告を発する。Hayakawa(*ibid.*)のそれに続く論述は根底において批評言語学と着想を等しくしていて興味深い。彼は自らの経験で知りうる世界を外在的世界（extensional world）と呼び，ことばを通してわれわれに達する世界を言語的世界（verbal world)と呼んでそれらを対立させる。人間は他の動物と同様に生まれてまず外在的世界と接触する。ところが他の動物と異なり，理解する（understand)することを学習すると，報告，報告の報告，報告の報告の報告を受けとりはじめる。さらに報告からなされた推論やまた聞き，また聞きのまた聞きによって知識のかなりを蓄積し，言語的世界を形成する。特筆すべきはこの「報告」や「また聞き」という現実のプロセスにおいてそれらを生み出す第三者の存在，あるいはその媒介としての言語に着目している点である。一般意味論がコミュニケーションの相互作用の過程に焦点をおくのに対し，批評言語学は言語構造の解釈に力点を置くという相違点，また批評言語学の方がより企業体としての新聞，イデオロギーの具現としての新聞，(反)体制的バイアスの産物としての新聞ということに力点が置かれるという相違点はあるものの，言語が現実世界の「写し」ではないとする，またはそういった考えの危険性を指摘するという態度においては共通する。「ニュースは生産物である」という見方は基本的には「記号はものその

ものではない」,「地図は現地ではない」とパラレルである。主にイギリスの批評言語学の論者たちがどの程度それと意図しているかは定かではないが，アメリカで発展した一般意味論ときわめて近い社会運動的性格を持っているわけであり，批評言語学もそのような枠組みにおいて正しく評価されるべきであると思う。Fowler（*ibid.*）でも，Winnie Mandela に関する記事の言語使用から政治の中では女性が例外的な存在であることを示したり，16才以下の青少年の避妊に関するレポートから体制，専門家，個人の暗黙の力関係のヒエラルキーを明らかにしたり，卵にサルモネラ菌が含まれているという一連の報道のヒステリカルな文体を材料にニュースの言語の特質を浮き彫りにしたりなど，社会と深く関わる事例の分析を試みている。

3．文化へのアプローチとしての批評言語学

批評言語学の第一の関心事は新聞報道のイデオロギー的な意味である[7]。前述のごとく，ニュースは「現実」そのものではなく，マスメディアが，厳密にいうとマスメディアの言語が仲介をなし，「生産物」として我々の前に現れる。批評言語学はこれが社会的な生産物だとする。新聞社はニュースを生産するひとつの企業であり，ニュースは新聞社という企業の官僚的，経済的構造，マスメディアと他の企業との関係，そしてもっとも重要なことに政府やその他の政治団体との関係によって形成される[8]。より広い視野でみればニュースはある歴史的な文脈の中での社会に広まっている価値観を反映し，逆に形成をもしているのである。Fowler の批評言語学は社会の権力構造が報道のされ方に影響を与えているとして，これらのイデオロギーを主としてあつかっているが，本論ではそれをかなり異なった観点から，いわば「文化」[9]へのひとつのアプローチとしてみてみたいと思う。Fowler はイデオロギー的な特徴の抽出，指摘を一つの目的としているが，本論の関心はむしろ，文化記号論的，人類学的，社会言語学的な面にある。従って，着眼点の違いから Fowler らのニュース分析とは自ずと異な

った結果が出てくるであろう。本論でイデオロギーに関心があるのはそれが文化的産物である限りにおいてである。ニュースが人間の産物であり，現実とニュースに人間が介在する以上報道の仕方そのものに文化的特徴が表れる可能性があると考えられる。

文化記号論（cultural semiotics, semiotics of culture）の観点からこの批評言語学的な文化へのアプローチを考えてみよう。一般に言語は文化の一部と考えられることが多いが，文化記号論には逆説的にも文化を「言語に似たもの」とみる考え方がある。これはいわゆるサピア-ウォーフの仮説（the Sapir-Whorf hypothesis）の延長線上にあると考えてよく，人間が自らのまわりに生み出す文化的な所産は構造的にも機能的にもすべて基本的には言語をモデルとして成り立っているのではないか，文化現象とは要するに擬似的な意味で言語現象ではないか，という仮説の上にたつ。無論，さまざまな文化現象，文化的構築物が等しく「言語に似ている」わけではなく，言語をモデルとは考えにくいものもあるが，ある種のもの，たとえば民話などは「言語に似ている」度合いが高いと考えられる。唐須（1988）が指摘するように，民話が「言語に似ている」証拠は単にそれが言語によって成り立っているばかりでなく，しばしば一つの文としてまとめることができるということによっても示される。逆にいうと民話などは文のような構造をもっているということである。Propp（1928）の古典的なロシアの民話の構造の研究においては，民話には「禁止」，「不幸や欠乏の解消」，「偽主人公の正体暴露」など31の単位（Propp の言い方では「機能」）があり，順序が決まっている（つまり，「文法」のようなものがある）とするが，すべての民話に31の機能が備わっているわけではなく，また「消去」や「置換」，「添加」などの変化形があるという。機能の「文法性」のみならず，このような変化形もまさに言語，文のレベル起こっているという点で，言語に似ている度合いは高いといえよう。

しかしながら本論では「言語としての文化」という視点をある文化的構築物を言語，または特に文に似ているものとして考えることにとどめないでおきたい。ここでむしろ強調したいのはもう一つの側面である。それは

我々のまわりの世界の諸現象を言語として，または言語によって認識する営み自体を「文化」の一部と考えようというものである。「事件」が起こった，という言い方をする。しかし，「事件」と「事件」にならないものとの境界線は決して明確ではない。そして「事件」以前の本来明確な構造をもたない事象が「文」あるいは「節」という構造を与えられることで明確な「事件」となる。文化記号論のモデルの一つと考えられるソシュールの言語学流にいうならば，連続性を本質とする自然状態は非連続的な関係の網の目が介入することで文化状態へ移行するわけだが，ニュースの言語が連続的な自然状態を非連続的な「文」に分節すること，言い換えれば「出来事」を作り上げること自体がすでに文化的な営みなのである。'fact' という語がラテン語の 'factum'（つくられたもの）に由来していることは象徴的である。

前章でも批評言語学の分析例を挙げた際に，出来事を「文」として表現することに着目したが，批評言語学的な文化へのアプローチが文化記号論的に意味をもってくるのはこのような点においてなのである。たとえば，池上（1981）が「する」的な言語と「なる」的な言語という言語類型で示したように，同じようなことがらをある言語では動作主を際だたせて表現しようとし，ある言語はそれをなるべく覆い隠して表現しようとする傾向があるというような類型の対立がある。同一の事象を異なったふうに言語化，すなわち認識し，それがニュースの言語にもあてはまるとすれば，それは単に言語上の対立ではなく，より「文化の類型」に近い対立と言えよう。報道という言語的な活動は[10]連続的な世界を非連続的な「出来事」に作り上げる営みであるが，報道されるためにはまずあることがらが連続体の中から非連続体である「出来事」として抽出され，文や節として描写されることで構造を与えられるわけで，「出来事」としての認識は言語によってはじめて可能になる。つまり，報道によって生産される「出来事」はすでに文化的構築物なのである。報道においては言語的な構造あるいは言語化のプロセスそのものが文化的構築物であるゆえ，その構造やプロセスを分析することはすなわち文化を分析することにほかならない。前述の「言

語としての文化」という視点から文化は言語と相同的な構造をもつものとして分析されるのであるが，本論でのその視点はこの意味において意義をもつのである。

さらにこの研究は井上（*ibid.*）でも指摘したように，異文化間の対照研究としてより有意義な形で提示することができるであろう。イギリスの2紙の例に見たように，伝えるべき「出来事」の選択，伝え方は新聞ごとに異ることが多いが，異文化圏の新聞と比べると逆に同一の文化内の新聞報道の仕方に共通点が見えてくる。つまり，報道の仕方には文化ごとに特徴があるのではないかと考えられる。同じ，あるいは類似の「出来事」が文化によって異なった構造を与えられていれば，より際だった形で言語化のプロセスを文化的な営みとして認識することができる。さらに日米における野球のように二つの文化に同じはずのものとして存在していながら異なったものと受けとめられ，報道されているとすれば，異なっているのは野球というよりむしろ「文化」の方とも考えられる。次章においては，このような「文化」へのアプローチの対照研究の事例として井上（*ibid.*）でも行った日米の野球報道の分析を取り上げたい。

4．事例研究—野球報道における参与者の日米比較—

ここでは前述した批評言語学における transitivity の概念を用いた分析を日米の野球報道に当てはめてみよう。特に，一つのプレーにおいてどの参与者（プレーヤー）に，どの程度焦点がおかれるかを示唆するような例をあげたい。日米のプロ野球報道をくらべてまず気づく違いは，アメリカの方が得点者の名が明記されることが多いことである[11]。選手名を明記することはその選手にプラスかマイナスの評価を与えているものとみなすことができるだろう。（例文のイタリック体は筆者）

(4a) Fernandez bounced a single to right to score *Molitor*.

（USA TODAY 1993年7月1日）

(5a) なおも二死三塁から石毛に　二塁打され，逆転。

（読売　1993年9月13日）

一般的に日本の方は誰が得点者か，つまり誰がホームベースを踏んだかということにはあまり関心は払われず，アメリカのほうが得点者の名を出すことでその選手を評価することが多いということである。アメリカの場合も常に得点者に対する言及があるわけではないが，日本の場合，得点者が誰であるかが記事でわかる場合は文章のつながり上そうなったと思えるもの以外はない。打点をあげたものに対する評価は日米ともに高いが，日本では得点者はほとんど無視されているに等しい。批評言語学的な言い方をすれば，得点が入るというプロセスの中でアメリカの方が参与者の項が1つ多いということになる。参与者を〈ACTOR〉と考えると(1b)(2b)になぞらえればつぎの(4b)(5b)のようになるだろう。

(4b) Fenandez bounced a single to right to score Molitor.
〈ACTOR〉 〈PROCESS〉 〈ACTOR〉

(5b) なおも二死三塁から石毛に　二塁打され，逆転。
〈ACTOR〉〈PROCESS〉

これは各試合の個人成績表にも言えることで，アメリカの場合には「打数」「得点」「安打」「打点」の四項目であることが多いのに対して，日本の一般紙の場合には「打数」「安打」「打点」（やや詳しい読売では「三振」「四死球」「通算打率」が加わるが「得点」はない）の三項目である。これが何を意味するかを次の例と合わせて考えてみよう。

(6) Bill Virdon grounded to shortstop *Tony Kubek* with one man on and it was an easy double-play ball.

（例文は山田・吉井（1976）から）

アメリカの報道においてはこのように打球を処理した野手の名も明記されることがある。これは日本の新聞を読みなれているものには無意味と思

われる記述である。日本の報道ではファインプレーとエラーに関するほかには野手名が明記されることは皆無といってよい。日本の方が投手対打者の対決が「一騎打ち」的に中心とされ，その他のプレーヤーは当該のプレーに関しては脇役にまわされる傾向があるのに対し，アメリカでは捕手，野手や走者にも，打者や投手と等しいとまでは言わないまでも比較的大きなウエートが置かれ，個人として尊重されているというような一般化が可能かもしれない。日本の伝統的なスポーツが相撲や柔道など‘game’ではなく，‘match’的なものが主であることとの関係も考えられる。(7)のような一打席の詳細な記述は日本の報道の特徴である。

(7)逆転を許した直後の六回。無死一，三塁で打席が回ってきた。1－3からの島田の変化球にタイミングが合わず空振り。次の直球は振り遅れてファウル。だが，次の内角シュート気味の速球は，狙いすましたように左翼フェンスへ直撃された。

（朝日　1993年6月13日）

数量的なデータをもとにしたより包括的な分析は紙面の都合上別の機会にゆずるが，これだけの例をみても同様のプレーが日米において異なったふうに報道されることがあるのは明白であろう。新聞報道をもとにした野球のモデルが実は選手達の意識にあるモデルとかなり一致すること，一対一の対決に焦点をおく日本型報道が一般に集団志向が強いと言われる日本人の性質とどのように関係づけられるかなどについては稿を改めて論じたい。ここではそれぞれの文化の新聞報道の特徴的な型を描き出すことが可能であることを示すだけで十分であると考える。

ただここでひとつふれておかねばならないのは，このような対照研究の対象として，日米については野球が適しているということである。例えば国際的な「事件」の報道を異文化間において比べることは可能であり，一見野球の場合と同様の事例にも思われるが，当該の「事件」への地理的，文化的距離などの，前に述べたニュース価はかなり異なる場合があるので，

対照研究になりにくい面がある（あるいはニュース価の観点における対照研究となろう）。かつてアメリカの構造主義言語学をもとにした対照研究が比較対照すべくとりあげた項目の等価性自体が問題となり批判されたように，異文化間に同類のものが存在するという事例は実はあったとしてもかなり少ないのかもしれない。しかしながら，日米における野球の場合は，ともに一般の注目を浴びている競技であり，選手の相互の交流が可能であり，そしてもっとも重要なことにほぼ同じルールにもとづいて行われているがゆえに，対照比較の対象としての正当性はかなり高いのではないかと思われる。

5．おわりに—文化の表象としての言語学に向けて—

本論においては批評言語学を一般意味論との類似点などにも言及しながら，社会運動として再評価し，さらに対照研究的な文化の記述へのアプローチとしての有効性を論じてきた。最後に「言語と文化」というテーマに関する池上（1983）の指摘に言及しながら，言語学，あるいは言語研究のひとつのあり方を示すことで本論を締めくくりたい。

池上の指摘によれば，二つの段階を経て，言語学者は「言語と文化」というテーマを論じたがらない、いわば禁欲的な態度をとるようになったという。まず第一の段階は，言語学が学問として確立し，印欧語以外の様々な言語についても共時的な特徴について分類しようとする言語類型学の発想が生まれた頃である。「孤立語」「膠着語」「屈折語」という分類が一般化し，これが「進化」の段階を表していると考えられると同時に，「家族単位の社会」「遊牧社会」「国家形態の社会」という社会の発展段階，あるいは「農耕型」「狩猟型」「産業型」といった文化の形態などと対応しているというようなことが言われた。しかし，これには実際的な根拠が希薄で，要するに比較的豊富な屈折語尾によって特徴づけられる印欧語を最高の言語形態と考えたいとする当時の前提のもとに生み出された都合のよい解釈だった。第二の段階は，いわゆる「サピア-ウォーフの仮説」ならびにそれをめぐって行われた議論である。「言語と文化」の相関性を論じる時しばしば

論及されるサピア-ウォーフの仮説と後によばれる考え方は，単純に要約すれば「人間の外界の見方は母語の構造によって決定される」というものである。しかし，この相関関係が余りにも強いものとして主張しているかのような印象を多く与えてしまい，人類学者らによって批判されることになった。このような主張とそれに対して当然なされるべくしてなされた批判を経験した結果，言語学者は一般に言語と文化の関係について語ることに強いためらいを感じるようになったようである。

文化と言語が直観的には深く結びついていると感じられるにもかかわらず，言語学はその結びつきを避けてきた。そしてそうすることこそがある意味では言語学の本質的な部分であるとも言えるので，これからもそうあり続けるであろうし，そのこと自体は反駁する必要もない。しかし，言語学が文化を語る強力な手段となりうることもまた確かであると思われる。これまで述べたような枠組みで言語学を応用するならば，それは社会や文化といったものを記述し，表象し，モデル化することが可能であろう。Barthes (1967) などの文化記号論的な著作はまさにその成果であった。言語学，あるいは言語研究にとって「文化」という研究対象はその枠外におかれるか，せいぜい「周縁的」なものとしかみなされない。しかし，ふたたび池上（*ibid.*）の言葉を借りるならば，文化人類学が言うように「周縁部」こそ新しい創造の始まる部分であり，チョムスキー流に言う「規則に支配された創造性」に対して「周縁部」においてはもっと本質的な意味での人間の創造性である「規則を変える創造性」の働きが見られるのである。また本論において提示した対照研究としてのアプローチは，それが野球のように対照項目が等価性の高いものであれば，異文化理解に寄与することが出来るはずであり，いわゆる「文化のコンテクスト」といわれるようなものにも具体的な知見をもたらす可能性があるだろう。批評言語学はこのような枠組みおいて社会運動から文化の言語学へと変わりうるのである。

註

（1） 文体論に基礎をおく Critical Linguistics に関する議論は筆者の知る限

りでは主にイギリスにおいて活発で，それ以外にこの用語が用いられるのを見ない。したがってこの訳語は筆者のものである。

(2) Fowler (1991).

(3) Hall, "The social production of news." in Hall *et al* (1978).

(4) 「暴動」という語はすでに中立性を欠いているのでここではカッコ書きした。

(5) 'transitivity' とは動詞のプロセスとそれを述部とする参与者の意味的なカテゴリーに基づく分析上の概念で，批評言語学の分析の中心をなす。詳しくは Fowler (1991), Simpson (1993) を参照。

(6) Halliday (1985) 参照。

(7) Fowler (*ibid.*) , p. 228ほか参照。

(8) Fowler はイギリス社会をおもに念頭においているようだが，むろんこれはすべての社会に当てはまるとはかぎらない（筆者にはむしろ当てはまらない事例の方が興味深い)。

(9) 本論では「文化」の厳密な定義は行わない。この段階では一般的に意味する「文化」と考えてもらってよい。

(10) 映像も実は連続体ではなく，非連続体であるという意味で「言語的」と考えられるが，これは記号論の別の枠組みの中で論じるべき問題だろう。ここでは新聞のような言語による報道のみを考えることにする。

(11) 個人記録上「得点」は実際に本塁に到達した者に与えられ，「打点」は安打や犠打などによって得点をもたらした打者にその得点分だけ与えられる。

引用文献

Barthes, Roland. (1967) *Systēm de la mode.* Seuil. 佐藤信夫訳 (1972)『モードの体系』みすず書房

Fowler, Roger. (1986) *Linguistic Criticism.* Oxford University Press.

——(1991) *Language in the News: Discourse and Ideology in the Press.* Routledge.

Galtung, Johann & Mari Ruge. (1973) "Structuring and selecting news." in S. Cohen & J. Young. *The Manufacture of News : Social Problems, Deviance and the Mass Media.* Constable. pp. 62-72.

Hall, S., C. Critcher, T. Jefferson, J. Clarke & B. Roberts. (1978) *Policing the Crisis : Mugging, the State, and Law and Order.* MacMillan.

Halliday, M. A. K. (1985) *Introduction to Functional Grammar.* Edward Arnold.

Hayakawa, S. I. (1949) *Language in Thought and Action.* Harcourt,

Brace & World.
Hodge, Robert & Gunther Kress. (1979) *Language as Ideology*. Routledge
池上嘉彦 (1981)『「する」と「なる」の言語学—言語と文化のタイポロジーへの試論—』大修館書店
—— (1983)『詩学と文化記号論』筑摩書房
井上逸兵(1991)「批評言語学と民族誌—異文化間比較の視点から—」『富山大学教養部紀要 (人文・社会科学篇)』第24巻 2 号 pp. 155-175
Propp, Vladimir. (1928) *Morfologija Skazki*. Nauka. 大木伸一訳『民話の形態学』白馬書房
Simpson, Paul. (1993) *Language, Ideology and Point of View*. Routledge.
唐須教光 (1988)『文化の言語学』勁草書房
Trew, T. (1979) "Theory and Ideology at Work." in R. Fowler, B. Hodge, G. Kress & T. Trew. (eds.) *Language and Control*. Routledge. pp. 94-116
山田和男・吉井徹郎 (1976)『野球の英語』文建書房